

咄しの次手、天下の儀畢竟關東と大阪可爲御鉢楯候。安房は功者の事に候間御先手相勤、諸事御指引被頼思召候旨御意に候處、安房申上候は凡軍の勝敗は、兵の多少に不因事に候へば、萬一大阪方利運の軍に候はゞ、如何可奉心得候やと被申上候所、其儀は兼て肥前も覺悟有之候。大阪勝軍に候はゞ必ず戰死の心得に候旨御意被成候へば、左様に候へば都ての意得相濟候旨御請候由。板津邊校話。松雲公御自筆に御記し被遊候一冊御前に有之、其第一箇條に此事有之旨、或人の物語の由有澤氏の話。

一、作州津山の一揆騒動

享保十一年丙午の冬、作州津山の城主石也。松平淺五郎殿重病に付、病中の用脚過分に入用に付、領内年貢米急々被取立、村々麥蒔等被差留、農具は村々名主共手前へ取集め、年貢收納を督責あり。依之十一月月上旬迄に八分計納之候。然處其後淺五郎殿終に逝去也。百姓共致徒黨、第一山中の村々麥蒔の時分、農具被取上麥種蒔得不申に付、里方とは違ひ雪降時節も違ひ、麥作不仕候へば來春飯米無之、必至と難澁に罷成候由、久世と申所へ津山より郡役人罷出候へば、右山中村の百姓三四千人罷出、段々願の趣申立候。依之爲

春中飯米二千俵賜候故、百姓も納得仕候。彼是及騒動候へども、忌中に付家老共も料簡仕り鎮め候由。其後西里郡百姓中申合、津山へ罷出候旨相聞え、津山より一里計西の方へ役人中罷出鎮之候に付、西の方は早々鎮り申候所、又北の方百姓中、津山より一里計北一の宮と申邊に廣野有之、此所に相集り、城下へ訴訟に大勢罷出候體にて、近邊の竹木を伐倒し燒之。城下へも夥敷相聞え候。依之西北の百姓兎角鎮り不申候。且又城下へ百姓共押取に罷出で、吟味の所盜賊の沙汰に罷成り、十二月百姓十三人召捕下獄候。春に成候ても鎮り不申、翌正月六日物頭・郡代・代官等其外人數大勢、津山より罷出で、土井村と申所にて百姓三十餘人召捕、其内二十五人早速殺害有之、其餘は牢舎申付候。依之徒黨の百姓共、此度の騒動發頭人は無之、一同の儀に候間御會議被止可被下と願候。然共會議不相止候故、百姓共氣遣仕候や、三四千人伯耆國境駄床山と申山へ取籠り、城下へも可押懸様子に相聞え、段々城下より役人罷出で、飛道具致持參候へども、高山手寄不宜候。大筒・炮烙等にて打散し候手當も有之候。其様子承及段々退散、降參一禮も仕り、先づ相

鎮り候。郡役人久保新平、百姓どもより惡事を申立つ。依之新平は牢舎仕候。舊冬より當春に至る迄津山騒動の間、隣國の衆中よりは、境目迄人數出し用心有之候。淺五郎殿幼少に付、家督は御減少五萬石にて名跡相立。大阪來狀